

彼女は日本のボクシング界のドンであった本田明 (p. 72 の写真を参照) のパートナーであった長野ハルとの間に、固い友情とビジネス上の紐帯を育んでいた。そして、ラウラはサリエルとフラッシュ・エロルデの亡き後にフィリピン人のボクシング界で非常に重要な役割を果たしてきたし、長野は本田亡き後に帝拳ジムを切り盛りして日本のボクシング界に多大な貢献をした。これらの逸話は、ボクシングの世界では有名なものであり、著者が知らなかったとは想定しづらい。もとより一冊の本で書ける内容は限られているため、本書からは省いたのかもしれないが、しかし「ボクシングと大東亜」に纏わる女性の経験を組み込むならば、より立体的に記述が構成されたのではないか。たとえば、女性の動きに注目することで、銀座や横浜でのアウトローの世界とボクシング界とのつながりを、より具体的に捉えられるようにも思う。

重要な著作とは、完結した作品のことでなく、さらなる議論を呼び起こす作品のことであるはずだ。本書はその意味において重要な著作であるが、ここで呼び起こされた数々の議論が、今後学術研究としてリレーされることを望む。

(石岡丈昇・北海道大学大学院教育学研究院)

引用文献

- アンダーソン, ベネディクト. 2012. 『三つの旗のもとに——アナキズムと反植民地主義的想像力』山本信人 (訳). 東京: NTT 出版. (原著 Anderson, Benedict. 2006. *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-Colonial Imagination*. London and New York: Verso.)
- Creak, Simon. 2015. *Embodied Nation: Sport, Masculinity, and the Making of Modern Laos*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Kitiarsa, Pattana. 2005. 'Lives of Hunting Dogs': *Muai Thai* and the Politics of Thai Masculinities. *South East Asia Research* 13(1): 57-90.
- . 2013. Of Men and Monks: The Boxing-Buddhism Nexus and the Production of National Manhood in Contemporary Thailand.

New Mandala. October 2. <http://asiapacific.anu.edu.au/newmandala/2013/10/02/pattana-kitiarsa-on-thai-boxing/>. (2016 年 11 月 11 日最終アクセス)

中村正志. 『パワーシェアリング——多民族国家マレーシアの経験』東京大学出版会, 2015, vii+298p.

I 本書の内容

エスニックな亀裂によって分断された社会では、エスニック集団の間の対立を穏健なものにし、多数派の専制に陥らずに少数派の意見を如何にして政治に反映させていくかが常に課題となってきた。そのための方策として様々な社会で長年試みられてきたのが、「主要エスニック集団による執政権の分掌」であるパワーシェアリングの仕組みである (p. 3)。新興国においては独立後にパワーシェアリングが試みられた例が少なくないが、そのほとんどが機能不全に陥って数年のうちに姿を消している。

エスニック研究の視点からは、本書が事例研究の対象とするマレーシアの社会は、エスニックな亀裂が交差するのではなく重複し、エスニック集団間の勢力が拮抗した社会であると分類されてきた。具体的には、マレーシア社会には多数派のマレー人と、少数派の華人およびインド人などマレーシア研究で言及される「民族」(bangsa) のラインに重複する形で言語、宗教、階級、職業、居住地といった亀裂が走り、社会が分断されてきた。

マレーシアでは主要なエスニック集団を構成する多数派のマレー人が独立以降は総人口の 5 割から 6 割を占めてきたが、主に少数派の華人がマレー人よりも経済的に優位にあったために、マレー人と華人を中心とする非マレー人との間で妥協が図られてきた。その妥協を現実のものにしていく仕組みが、主にエスニック集団に基づいて結成された複数の政党が参加する与党連合による統治である。独立以来続いてきた与党連合による統

治の中核には常に多数派のマレー人を主な支持基盤とする統一マレー人国民組織 (United Malays National Organization: UMNO) が君臨してきた。その一方で、UMNO のライバルとして同じくマレー人を支持基盤とする野党の汎マレーシア・イスラーム党 (Parti Islam SeMalaysia: PAS) が存在し、マレー人からの支持を獲得しようとして長年対立してきた。

社会が重複するエスニックな亀裂によって分断されている中で、政治はパワーシェアリングの典型ともいべきエスニック集団をベースとする複数政党が参加する連立政権によって担われる。その一方で多数派エスニック集団を支持基盤とする与党に同一の支持基盤を持つ野党が対抗している。こうしたマレーシアの社会と政治の状況は、エスニック研究、紛争研究やそれらと関連する政治学の先行研究が築き上げてきた理論のレンズを通してみれば、複数の多数派集団を代表する政党同士がライバル政党に競り勝つことを目指して少数派を犠牲にするような急進的政策を掲げる「アウトビディング」が起り、結果としてパワーシェアリングが容易に崩壊してしまう例と考えられるはずである (pp. 39-40)。しかし、現実にはマレーシアは新興国の中でもパワーシェアリングが独立以降半世紀以上続き、エスニック集団間の対立の激化が抑制されてきた例外的な事例である。そこで、本書冒頭に紹介されているマレーシアのナジブ首相とアメリカのヒューズ国務次官との会談でのコメントのように一部外交筋の間では、マレーシアがパワーシェアリングによる紛争管理のモデルであるとの見方もでてくる。こうした事例としてのマレーシアの前提と理論的考察を踏まえつつ、本書は特に選挙と多数派集団の与党に着目して、「『多数派民族集団の政党が少数民族集団の利益を尊重するのはなぜか』という問題に関する新たな知見を提示することをめざし」している (p. 6)。

この目的を追求するうえで、本書は具体的な 2 つの問いとそれらへの仮説を設定することで取り組むべき課題をより明確にしている。第一の問いは選挙を通じて如何にしてパワーシェアリングを生み出すかという問題であり、「どのような場合に異民族政党間の票の共有 (vote pooling) が生じる

のか」という点が問われる。第二の問いは多数民族与党がアウトビディングをどのように防ぐかという問題であり、「多数派民族政党の指導者は、どのような場合に党内の異論を抑えて穏健政策を実施できるか」という形で問いが立てられる。

この 2 つの問いに対して本書はモデルから演繹的に次のような仮説を抽出した。第一の問いに対する仮説は、「異なる民族の政党が、選択投票制 (Alternative Vote: AV) のもとで政策的に歩み寄ったとき、ないし 1 人区相対多数制 (First Past The Post: FPTP) のもとで統一候補を擁立するとき、民族混合選挙区の数が十分多ければ票の共有の効果が期待できる」(仮説 1) である (p. 9)。第二の問いに関する仮説は、「多数派民族政党において、党首以外の幹部ポストの価値が高いほど穏健政策がとりやすい」(仮説 2)、「多数派民族政党において、党首と対抗エリートのポストの価値の差が小さいほど穏健政策が採用されやすい」(仮説 3)、の 2 つからなる (p. 9)。

本書の行論はこの 3 つの仮説をマレーシアの事例を通じて検証する形で進む。結論として、仮説 1 および仮説 2 は検証できたものの、仮説 3 は検証できなかった。仮説 1 をマレーシアの事例に当てはめてみれば、選挙制度に FPTP を採用するマレーシアでは民族混合選挙区が十分な数あり、そこで与党連合の統一候補が立てられて異民族与党間で票の共有が行われているからこそ与党連合はこれまで優位を保ってきた。仮説 2 の検証の過程で地方制度、議会制度、政策決定と人事にかかわる UMNO の制度を検討した結果、党首以外の閣僚、議員、地方組織幹部らは、党首と比較すると小さいが、それでも付帯利益の面にみられるように「金持ちになるには政治家になるのが近道」といわれるほどポストに付随する大きな利益を享受していた。また、UMNO の党幹部の多くが異民族間での票の共有の恩恵を享受していることが分かった。その一方で仮説 3 の検証過程からは、マレーシアの執政制度がイギリス型の宰相システムで、執政府において首相=UMNO 総裁が強い権限を握るだけでなく、党内人事でも総裁が広範な裁量権を握るシステムのため、首相=UMNO 総裁のポストの価値が抜きんでいることが分かった。

そして、UMNO 総裁はレントの供給などを通じて、地方幹部ポストの価値を高めることで党内支持を確保してきたこと、総裁ポストをめぐる競争の「掛け金」が高いことが、対抗エリートの総裁への挑戦を促す要因となってきたことが示唆される。

他方で、2008 年総選挙では従来はみられなかった変化が起こった。特に野党間で民族的イシューが後景に退いて異民族政党間の協力が進むとともに、与党連合が大きく議席を減少させたのである。この原因として本書ではインターネット利用の急速な拡大で与党の政治宣伝の効力が削がれ、与党による票の共有の効果が薄れたことが示されている。

本書は最後にマレーシアのパワーシェアリングの経験がエスニック紛争管理のモデルになり得るかとの問いにも答えようとしている。本書の考察からみえてくるのは、歴史を振り返れば、一連の制度導入の順序や組み合わせがパワーシェアリング政権の安定性に重要であり、特定の経験を他国が丸ごと模倣するのは困難であるとの結論である。さらに、事例としてのマレーシアのパワーシェアリングの安定性は、首相＝UMNO 総裁への権限の集中と彼が党幹部を懐柔する手段としてのレントの供給に依存してきたものであり、「政治権力の正統性を左右しかねない争点を、利益分配の問題に置き換える」操作を通じて維持されてきた (p. 257)。そのためマレーシアでは民族的イシューではない汚職・金権政治と市民的自由の統制といった異なる対立軸の構築が長年妨げられる結果にもなってきたと指摘される。

II 本書の評価

本書の最大の特長は近年体系化が進んできた政治学のリサーチ・デザインに基づいて、理論モデルを通じた考察から演繹的に仮説を提示し、マレーシアの経験的事例から検証を行い、さらには一般理論への貢献を目指すそのスタイルにある。こうした研究スタイルはマレーシアを対象とした研究では一部の例外を除いてこれまでほとんどみられなかったものであり、本書の先駆的な研究スタイルは非常に大きな意義を持っている。

問題の所在と仮説の提示を行った第 1 章と第 2 章のあとの各章では、計量分析、歴史分析、制度分析といった異なる研究のアプローチを複合的に採用する一方で、マレーシア政治に関わる重要なデータが豊富に示されている点も見逃せない。第 4 章と第 8 章では選挙やメディア受容に関わる豊富な計量データを用いた選挙分析がなされる。第 5 章では制度論的観点から首相＝UMNO 総裁および、UMNO 党幹部ポストの価値がはかられるほか、上院や廃止された地方自治体選挙制度についても言及されるのは注目すべき点である。さらに、第 3 章、第 6 章、第 7 章で展開されたマレーシアの政治史の綿密な記述は今後のマレーシア政治研究の基本文献として参照されるべき価値を持っている。

本書が冒頭で掲げた「多数派民族集団の政党が少数民族集団の利益を尊重するのはなぜか」という問いについては十分に解明できていると考えられる。ただしその一方で、本書には十分語られなかった今後の研究に期待すべき点や若干の改善が必要な点もないわけではない。

本書はリサーチ・デザインの段階で多数派民族政党に議論を集中させ、少数民族にあたる華人やインド人、ボルネオ島の政党には言及しないことが述べられる (p. 12)。とは言え、パワーシェアリングの起源にあたる 1940 年代から 50 年代の独立期を扱った第 3 章と、1969 年の民族暴動 (5.13 事件) を経てパワーシェアリングの制度組み換えが起こった時期を扱った 1970 年代前半の第 6 章では、先行研究も参照しながらマレー人と党 UMNO だけでなく、華人とインド人の与党の動きや、与党連合内での異民族政党間の交渉過程にも一定程度言及されている。しかし、1980 年代以降の政治史にあたる第 7 章では華人とインド人の与党への言及はほとんどなくなり、UMNO 内の抗争のみでマレーシアの政治史が展開していく (ようにみえる)。本書は先行研究への批判として第 6 章で 5.13 事件以降にパワーシェアリングが破綻したのではないと結論づけた。しかし、1970 年代以降は破綻ではなくとも従来のパワーシェアリングの仕組みが段階を経ながら徐々に UMNO に有利なものへと質的に変容を遂げていった点は確実であろう。本書

は国際比較の観点からは例外的ともみえるマレーシアのパワーシェアリングの継続性の要因を明確に示すことができた一方で、変容の実態、過程や要因については継続性ほど十分な議論が展開できていないように思える。

この指摘とも関連するのが、2008 年総選挙の評価にあたる第 8 章である。2008 年総選挙で票の共有が失われて与党が優位を失ったのは、インターネット利用拡大によって政府・与党による争点操作が失敗したことが要因であるとされる。しかし、この議論の導入は前章までの綿密なリサーチ・デザインに沿った行論と比べると、本書が当初想定したモデルの外生的要因の変化であることもあって、読者はいささか唐突感を感じざるを得ないのではないだろうか。この議論を構成する重要な要素は、第 8 章で検証されたインターネットの効果とともに、マレーシアでは政府・与党のメディア統制による争点操作が長期のパワーシェアリングや与党体制の継続を大きく左右してきた（加えて、少なくとも政府・与党はそうした認識のもとでメディア統制を行ってきた）との前提である。本書でこの前提を支えるのは先進国で発展してきたマスコミュニケーション研究の理論の一般的な仮説にとどまっている（pp. 227-228）。一般理論の仮説だけでこの前提を追認するのは不十分であるとともに、もう少し丁寧な説明が必要だったのでは

ないか。

以上は、本書が想定する当初のリサーチ・デザインを踏み越える点でもあり、無い物ねだりの感がないわけではない。むしろ、パワーシェアリングやそれと関連したメディア統制の変容という側面は本書のあとに続く研究が今後深めるべき論点でもある。

その一方で、若干の改善が必要と思われる点が 2 点ある。最初の点は、仮説 2 と 3 の検証で議論となった UMNO の党幹部ポストの「価値が高い」とか「価値の差が小さい」といった言葉について何を基準にしているのかが不明瞭な点である。

2 点目として本書には「エスニシティ」および「エスニック集団」と、「民族」という用語が混在しており、定義や使用の際の条件について十分な説明がなされていないために読者の混乱を招くのではないかと懸念される点もある。

しかし以上のような書評者の指摘は些細なものであり、本書の価値を損なうものでは全くない。本書はマレーシア政治を研究対象としながら、事例を超えるパワーシェアリングをめぐる一般理論への貢献を目指す野心的な試みであり、新興国の政治に関心のある読者一般に広く読まれるべき著作である。

（伊賀 司・京都大学東南アジア地域研究研究所）